

2019年2月1日

地図に想う — その1

公益財団法人 国際通貨研究所
理事長 渡辺博史

年末や月末になると色々起こる最近の状況からみると、月末数日前に入稿するこのメルマガは、世の中の急変を追いかけ切れていない恐れがある・・・ということを口実に、少し時事問題ではなく「動かない」事柄を書いてみよう。

世界を視覚的に見ることを助ける地図を巡る話である。

日本の将来を冷静に考える「俯瞰的外交」をするためにも、正確な地図を見て、的確に読む能力が無ければならない。

ということであるが、まず、トリヴィアの質問をいくつか。

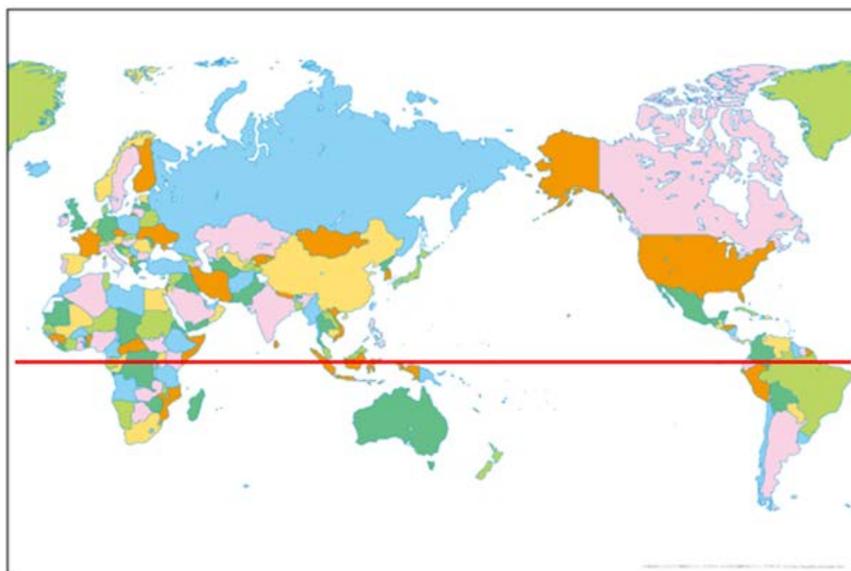
- ① チリのサンチャゴから真北に飛ぶとアメリカのニューヨークに着く。
- ② インドのニューデリーは、ネパールのカトマンズより北にある。
- ③ アフリカ大陸の面積は、アメリカ、中国、インドの面積を合わせたよりも広い。

これらの答えは、いずれも ○ である。直ちに全問に正解を出せた方は以下をお読みいただく必要は無い、と思うが・・・

[中心線の設定]

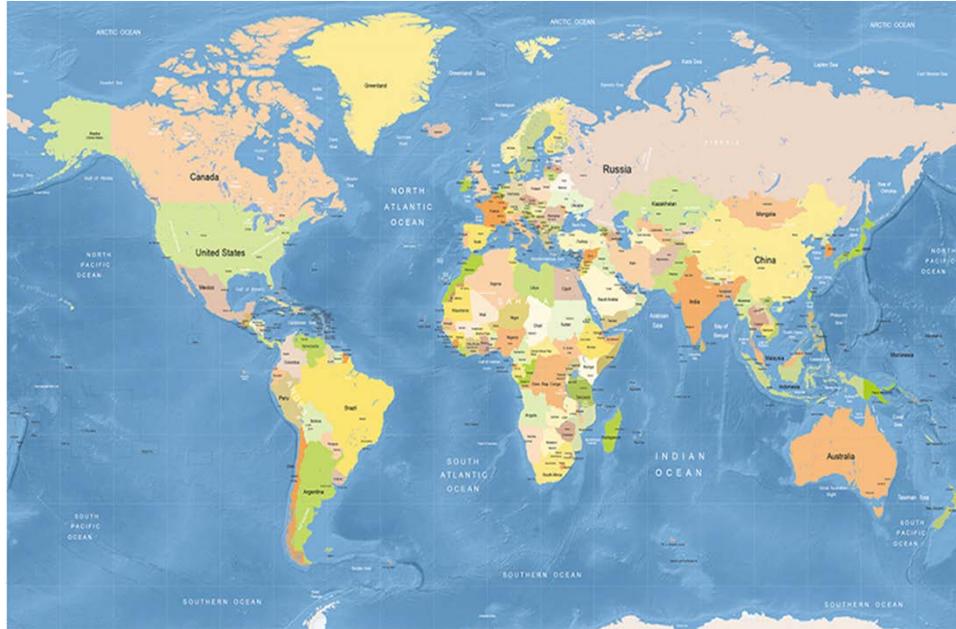
日本で普通に見かける地図は、地図1のような、日本というか太平洋を中心においた地図である。日本が海洋国家であることを痛感させる配置である。

<地図1>



ヨーロッパに行けば、当然のことながら、経度ゼロのグリニッジを通る子午線を中央に置いたものになる。近東、中東、極東という言葉の由来がスッキリ頭に入るし、ヨーロッパがアメリカ・ソ連の冷戦の狭間に有ったという歴史的事実と当時のヨーロッパ諸国民の感覚を強く認識させる配置である。

<地図 2>



アメリカに行くと、全てではないが、南北アメリカ大陸を中央におき、ユーラシア大陸をバッサリと二つに分けて、アメリカを挟む大西洋の右と太平洋の左に一つずつ置くという「ジコチュウ」の極みのような配置を良く見かける。アジアとヨーロッパのどちらにピボットを置くかという議論が自然な姿になる。

<地図 3>



(オーストラリアに行くと、南極が上にある逆さまの地図を使っているという話も聞かえてくるが、土産物店以外では、実はあまり見かけない。)

これらの地図のポイントは、①世界における自分の位置の認識に大きな影響を与える、ということと、②地球が丸いことを忘れさせる、ということである。

①については、既にいくつか簡単に述べたが、日本や韓国の近代化の経路はユーラシア大陸経由のものではなく、アメリカ経由で太平洋を超えて来たという、いわば「極西」の存在であるということ忘れさせる。

②について言えば、先ず、イ) 地球の裏側に行くときに東周りでも西周りでもたどり着くことが可能なことが分かりにくく、例えば日本からブラジルに行くときに、ヨーロッパ経由で行くことには強い違和感が出てくる。時差 12 時間ということは、まさに地球の反対側にいるので、どちら周りでも距離は同じであるのだが、日本で地図 1>を見慣れているとそういう発想にはなりにくい。

ロ) また、一時バンコクとニューヨークを結ぶノンストップ便があったが、このフライトは常に東に向けて飛び偏西風を追い風に使い、往路と復路が全く違うということも地球が丸いからできるのであるが、これも素直に頭に入りにくい。

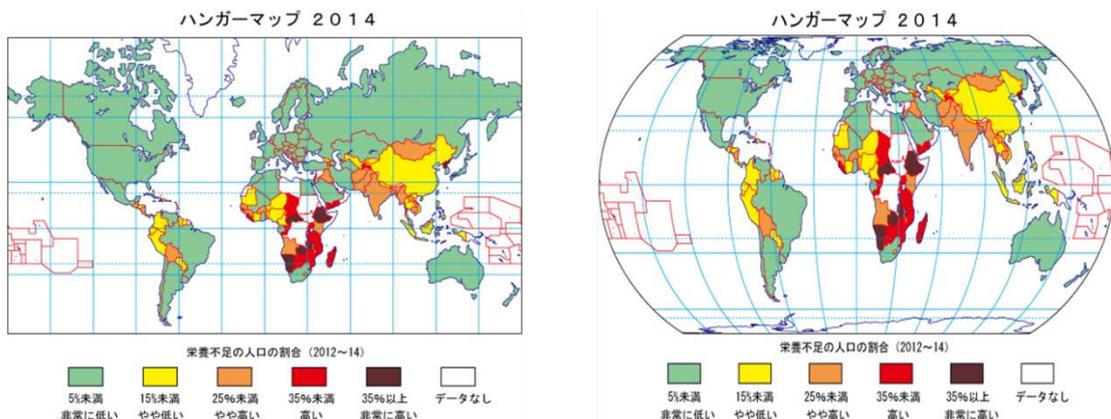
[メルカトール図法の歪み]

日本でも他の地域でも良く見られる図法はメルカトール図法である。

この図法は、球体である地球を円筒に投射して作られ、経度と緯度が常に直角になるので、磁針を一定に向けて航行するのに便利のため航海時代にその有用性が評価され、広く使われた。しかし、本来経線同士は極点において一つに収束するはずなのに、高緯度地域でも間隔が赤道と変わらないということは、高緯度地域の面積が大きく表わされる。例えば緯度 60 度においては、本来の緯線の一周の長さは赤道の半分なので、長さが実寸の 2 倍、したがって面積は二乗の 4 倍に表されている。更に北にあるグリーンランドは、面積が何と 17 倍にもなっている。

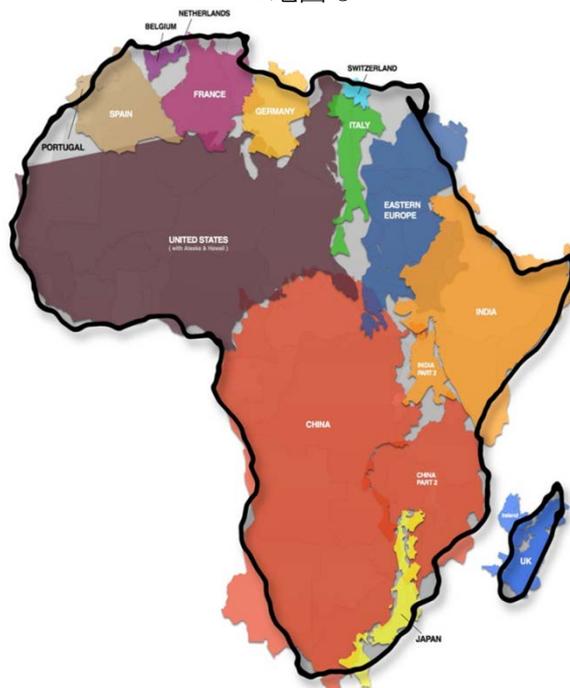
この事実をヨーロッパ人は植民地政策に意図的に利用した。即ち、本国の面積は植民地地域に比べればはるかに小さいのだが、それでは本国の権威を貶めかねないということで、メルカトール図法を使うことによって、自国を大きく見せていたのである。<地図 4>の左側はメルカトール図法、右側は正積図法であるが、この両者のアフリカとヨーロッパの大きさの比は顕著に異なっている。流石に最近では、ヨーロッパ諸国は、これを反省し、公的機関の建物内に掲示される地図は正積図法に移行し始めている。

<地図 4 >



また、貧困問題、安全な水へのアクセスといった現状を表すときに、仮に赤く塗られた地域が問題有りとする、それに該当するアフリカ、南アジア、中近東といった地域が相対的に小さく表示されるので、狙った視覚的な警告効果が薄れるといったことも起こっている。冒頭のトリヴィアクイズの③でその一端を述べたが、実はアメリカ、中国、インドのみならず、西ヨーロッパ、日本までも包含される面積の大陸なのである（流石に、ロシア、カナダ、オーストラリアまではカバーされないが・・・）。

<地図 5>



この大陸が、現在の約 12 億人の人口から、少なくとも 25 億人に増えて行くという推計はけして不思議なことでは無い（先に述べた三か国だけでも、現状 30 億人弱の人口があり、その国土のかなりの部分は、砂漠なり、山地であり、可住地域の面積はアフリカ全域と大差ない）。その認識をキチンともった上で、食糧自給の問題を含めて、その展望を考えていくことが、国際社会に求められている。

(以上)

『その 1』と書いたが、来月も続けてこの話を当然に扱う訳では無い。ご懸念なく???

(IIMA メールマガジンへの寄稿)

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、何らかの行動を勧誘するものではありません。ご利用に関しては、すべて御客様御自身でご判断下さいますよう、宜しくお願い申し上げます。当資料は信頼できるとされる情報に基づいて作成されていますが、その正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。また、当資料は著作物であり、著作権法により保護されております。全文または一部を転載する場合は出所を明記してください。

Copyright 2019 Institute for International Monetary Affairs (公益財団法人 国際通貨研究所)

All rights reserved. Except for brief quotations embodied in articles and reviews, no part of this publication may be reproduced in any form or by any means, including photocopy, without permission from the Institute for International Monetary Affairs.

Address: 3-2, Nihombashi Hongokucho 1-chome, Chuo-ku, Tokyo 103-0021, Japan

Telephone: 81-3-3245-6934, Facsimile: 81-3-3231-5422
〒103-0021 東京都中央区日本橋本石町 1-3-2
電話 : 03-3245-6934 (代) ファックス : 03-3231-5422
e-mail: admin@iima.or.jp
URL: <http://www.iima.or.jp>